

## 125 「僊臺」は「仙臺」のことか

問 漢詩文などに「僊臺」という語が使われているのを、時たま見ますが、これは「仙台」のことでしょうか。

答 例えば、頼三樹三郎の漢詩『落日僊臺下。古今事奈何。(中略)偉志違時運。英雄遭止戈。(下略)』の中の「僊臺」は「仙臺」のことです。<sup>(1)</sup>中国の字書「正字通」(せいじつう)に『僊同仙』、『康熙字典』[こうきじてん]に『僊同仙』『仙僊也』とあり、<sup>(2)</sup>従って、わが国の「大漢和辞典」(諸橋轍次)<sup>(3)</sup>をはじめとする漢和辞典類にも、そのように載っています。「仙臺」の表記は、2字の画数がアンバランスなためか、視覚的な整正を求めてか、多くの場合文芸表現用として、学者や文人墨客の間で「僊臺」と書かれることもあったようです。

勿論、地名としての正式な表記は「仙臺」であります。伊達政宗の命名とされ、「貞山公治家記録」巻20下に、このことを次のように記しています。

『(慶長五年)〇十二月己丑小廿四日甲午。辰刻、公、千代城へ御出、御普請御繩張始メアリ。文字ヲ仙臺ト改メラル。昔時此城ノ側ニ千體佛アリ。因テ千體ト号ス。其後、文字ヲ千代ト改ム。

此城、元ハ国分ノ前主国分能登守殿守氏、先祖ヨリ居住セラルト云云。』。「治家記録」は後年の編纂ですので、これに先行する「仙臺」の文字の明確な初見を求めると、伊達政宗の慶長6年4月18日付今井宗薫宛書簡(「仙台市史」第8巻の内)の文中に見ることができます。すなわち、<sup>(4)</sup>  
『(前略)

一去十四日此地仙臺へ相移申候 誠陳〔マヽ〕屋之躰本丸壁さえつけ不申候躰ニ候へ共 無理ニうつつ申候 内府様如此御繁昌之間者 各城などの普請更ニ不入由存候間 一切不仕候 其躰可有御分別候(下略)

恐惶謹言

(慶長六年)

卯月十八日

政宗(花押)

(今井)

宗薫老

人々御中』

これに次ぐものとして「仙臺橋擬宝珠銘」があります。

『仙臺橋

仙人橋下

河水千年

民安国泰

敦与堯天

慶長六年<sup>辛</sup>臘月吉辰

藤原政宗

門士川嶋豊前守奉造 』

なお、このことについて、「仙台地名考」（菊地勝之助）に次のように記されていますが、文中に用語の適正を欠くものがあるので、訂正を要します。

『しばしば古書などに「僊臺」の文字を見ることがある。之は仙台の<sup>××</sup>類字である。』「類」という漢字のもつ意味は「似」で、「類字」とは「形の似た文字、形の似かよった字」のことで、例えば「爪」と「瓜」、「大」と「犬」と「太」、「巳」と「已」と「己」などをいうものであります。

なお、「僊台」または「仙台」の表記をした文人墨客等もありました。「台」は臺の古字であります。古字とは、昔用いられ今はすたれた文字をいいます。

注(1) 幕末の志士。頼山陽の三男として、文化8年〔1825〕京都に生れた。名は醇、字は子春、号は鴨崖、古狂生。大阪に赴き後藤松陰の塾に学ぶ。後ち江戸に出て昌平黌に入り佐藤一斎につく。又梁川星巖に詩学を学ぶ。弘化3年〔1846〕蝦夷地を実査するが、その往路仙台・松島・石巻を経て三本木に知己伊東文叔を訪ね10日餘滞在している。その際の所作が、この「僊臺所感」の漢詩である。

『落日僊臺下 古今事奈何 曠田窮海尽 群嶂背城多  
偉志違時運 英雄遭止戈 可憐一市雨 唯唱潯々歌』

注(2) 音韻字書。全12巻。明、張自烈撰。清の廖文英がその稿本を購って自著とし、自序を冠して南康の白鹿洞で版行した。

注(3) 漢字の字書。全42巻。清朝第4代の皇帝聖祖康熙帝の勅命をうけた張玉書、陳延敬らの撰に成り、康熙55年〔1716〕刊。歴代字書の集大成ともいうべく、所収総字数4万2千餘。その後編纂される字書は、総てこの書を範とした。

注(4) 安土桃山・江戸期の茶人。今井宗久の子として天文21年〔1552〕生。諱は久綱、通称帯刀左衛門、入道して宗薫。堺の豪商・茶人の家にあつて茶湯を修め、豊臣秀吉の茶頭〔さどう〕となった。後ちに徳川家康に仕え、その茶頭をつとめた。寛永4年〔1627〕没、76才。宗薫は、上刃に対し陰然たる影響力をもっていたので、諸大名のうち、茶道の上だけでなく、保身や情報キャッチの便宜上、彼を懇意にしていたものが少なくなかった。政宗もその1人であった。

資料 「大漢和辞典」第1巻（諸橋轍次）

「康熙字典」